

『伝光録』の業・因果論

著者	吉田 道興
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	12
ページ	17-23
発行年	2007-04
URL	http://doi.org/10.24791/00000427



『伝光録』の業・因果論

愛知学院大学教授 吉田 道興

アングリマールの話は示唆に富んだ話でした。インドの業報思想が中国に伝承されてから、因果という概念が中国にはなかったのですが、それが定着し日本に伝わってきました。道元禅師は鎌倉後期ですが、懐奘禅師、義介禅師を経て瑩山禅師につながります。道元禅師の『正法眼蔵』と並んで、曹洞宗では太祖・瑩山禅師のライフワークが『伝光録』です。

正安二年、瑩山禅師が三十歳半ば、お釈迦様から、お釈迦様は特別の章(首章)ですが、そのあと、摩訶迦葉を第一祖としてインド・中国・日本の曹洞宗につながる祖師たち(第五十二祖)までの言行録、生涯、仏祖の大事な言葉などをピックアップして、瑩山禅師が提唱・解説をされています。

レジュメに私は『伝光録』に四つの柱を立て「業・因果論」の捉え方を示してあります。これは業報論と書いてもよいのですが、一、神秘的業・因果論。そして二、倫理道德的業・因果論。三、積極的業・因果論。四、宿命的業・因果論です。

特に、三、積極的業・因果論は、瑩山禅師が別の祖師の生涯を説かれる中で、ご自身が過ごされてきた半生を振

り返って述べておられます。そして最後に、四、宿命的業・因果論は矢島先生が前世から決められているという必然論として押さえていましたが、それに該当します。

この四つは便宜的に分けただけです。これら仏祖のエピソードは、一人の仏祖でも、この四つのいくつかが付随し、重なっていると考えてください。

一、神秘的業・因果論は、ミステリアスな、ちょっと現実の世界では起こりえない、いえ起こりえないというよりも、信じるか、信じないかということにも関わるのですが、すぐにわかったというのとはちょっと離れた話です。「授記」(vyākaraṇa) というのは将来、悟りを得られる予言を与えられるという意味です。代表例をいくつか話します。

この神秘的業・因果論Ⅱ業報論は、阿難陀尊者章。阿難陀尊者はお釈迦様の元のお妃の弟であり、晩年二十年ほどのお釈迦様に仕え、「多聞第一」といわれるようによくお釈迦様の教えを記憶していた記憶力抜群の方です。『伝光録』の説示・原典は、中国の宋代に編纂された『景德伝燈録』が中心になっています。

この中に、阿難陀尊者はお釈迦様と同じく、遙か昔、気の遠くなるような大昔に、空王如来の時代に一緒にいられて発心した。つまり、真理に向かって努力をされた。いままたまた、従兄弟同士の出会いでつながりがあるので、昔から出会いはあったのだということをお説いています。

浦島太郎の「龍宮伝説」につながるのが龍樹尊者です。海底にドラゴン(龍王)がいて、これは一種の神秘的存在で、そこに大事な宝物・教えが所蔵されていて、そこへ何度も龍樹などの大乘仏教の大成者が行って、過去七仏の教えのテキストを読んだ、ということが書かれています。鶴勒那尊者章の提唱(解説)には瑩山禪師の発心(自己本性の旨)と関わりがあります。これは時間があれば後で触れます。

二番目の倫理道徳的業・因果論、いわゆる道徳律、良いことをすれば良い結果、悪いことをすれば悪い結果になる。それを仏教ではアレンジして良いことをしたら安楽な結果、悪いことをしたら苦しい結果を生む（「善因果果、悪因果果」と説き、ほかにも複雑な因果を説きます。一面的に言えば人間関係の上で、自分の行為に責任を持つと、それが保証されるというようなことです。

代表例は、弥遮迦尊者章、洞山悟本大師章です。弥遮迦尊者章の中では、お釈迦様の在世当時、ヒマラヤの仙人アシタ仙人は、お釈迦様が生まれたときにお祝いに行つて、将来、転輪聖王、すなわち世界を征服するような偉大な王になるか、仏陀、すなわち宗教真理の体得者になるであろうということで、涙を流された。それを見て父王は「不吉なことだ」といいました。実は、王子が成長するころには、私は高齢でこの世におりませんといった方がアシタ仙人です。

そのアシタ仙人と同名の仙人が過去世、弥遮迦尊者に将来悟ることができ（無漏果を得る）という「授記」を与えられていた、ということが書かれています。これは前の神秘的業因果論につながります。

洞山悟本大師章には、洞山良价という曹洞宗の高祖と尊称されている方のエピソードがあります。洞山は父が早く亡くなり、母が老齢の時期に出家します。母は引きとめたのですが、若い洞山は仏道修行のほうが大事だと、出家を決行してしまいました。母は息子を恨み、悶死したと説かれています。

一方、修行中の洞山は夢をご覧になります。夢の中で、恨み悶死した母は忉利天に昇天し、生まれ変わった。なぜ母はそこに昇天できたのか。それは息子の洞山が出家修行した結果、その功德、善根力によって生まれ変わったのだと説かれています。

三つ目が積極的業・因果論です。業・因果論は一般的な道徳律であっても、前世からのつながりで今、容貌、境

遇などでハンディを背負う人たちの現状を説明すると、人権差別の問題につながります。そういうような前世の業がこの世にどう現れているかという意味を表す「宿業」という言葉を使いながら、逆に、瑩山禅師はそれを積極的に受け止めて、ご自分なりに価値転換をされています。

結局、「^{たと}設い知識ありて云々」とレジユメにある前に「如来在世より八百年ほど過ぎて云々」という言葉があります。末法の世になり、お釈迦様はもちろん亡くなっていて、教えもだんだん薄れ、修行者も平気で破戒するような状況になる。そういう状況、正法、像法、末法と変遷していく中で末法を八百年以降とする説と、千年以降からとする説とがあります。瑩山禅師はその末法のこの世に生を受けたという次のような強い自覚があります。すなわち「^{いさ}設い知識ありて、大慈大悲の教誡に依て、聊かその覚知了ありといへども或は懈怠に侵されて、真実の信解なし。故に真実の道人なければ真実発心する者なし。実に末世の澆運、宿業の拙きに依つて、是の如き時分に遭えり。愧じても悔いても余りあり。」（十七祖僧伽提章）と。

これは私なりの解釈ですが、瑩山禅師は前世の自分の記憶はないが、それが非常に残念である、それを前向きに転換して積極的に受け止める、だれのせいにもしない、いかに自分は生きるべきかということを真剣に受けとめ考えておられる文章だと思われるのです。

四つ目が一番問題になるのですが、四、宿命的業・因果論です。人生は前世で決まっています今世ではどうにも動かしようがない、ということ。「業因（前世の業）」が必然的にあり「業果」として現れる、と受けとめるのです。三の「宿業」「業病」という言葉が多数使われます。先ほどと同様に、差別性、人権侵害につながる内容が込められています。

代表例が二つあります。二十祖章の闇夜多尊者章には、「我家の父母素より^{もと}三宝を信ずれども而も嘗て^{しつさい}疾瘵に^{まわ}榮

る

(中略) 而して我隣家は久しく旃陀羅の行を為す。而して身常に勇健にして所作和合す(中略)とあります。その前後、一般にいう因果律では、前世で良いことをしたらこの世に良い結果が現れるはず、その逆、悪いことをすれば悪い結果もあります。ところがこの例ではそれが逆転しています。この世において熱心な仏教信者だが、思うようにならない、不幸な身の上、貧乏な状態である。ところが、隣家はどうか。

まず「旃陀羅(チャンドーラ)」というのはカースト制度の中で、身分の高いバラモンの女性とシュードラという奴隷階層の有色人男性との間に生まれた子どもを旃陀羅といっています。

古代インドではカースト制度の身分差別とともに、男尊女卑の性差別の両面があるわけです。男女の上下の関係でまったく違うようですが、そういう生まれの人は一定の蔑み、卑しめられる職業に就かざるをえなかったのです。下水道の清掃、とくに大小便の処理とか、醸造業、また動物の屠殺業などです。そういうことをしているにも関わらず、この世では健康で裕福な生活をしている、これはどうしてか。いわゆる善因善果、悪因悪果といわれるような、道徳律からいうと全く矛盾しているということの問題にしているのです。

普通の因果論では、過去世から説かれますが、ここでは現在の状態とその結果を「三時業」、すなわち順現業、順次生受業、順後業という論理で示されます。たまたま現世で悪いことをしていても、前世で良いことをしているので、良い生活をしている。また、いま仏道修行をしていて、熱心な信者であっても不幸な生活をしているのは、前世で悪いことをしてきたからだと説明しています。(一般の「三時業」は、現世の因から来世の果が説明されますが、)ここではその応用の論理で説かれているといえます。

二十祖章ではまず、「三時業」の教理について現世を起点に、この世で報いを受けるのが順現業、次の順次生受

業というのは亡くなった後、次の世に生まれ変わって輪廻転生のように現れる場合、さらにその後、遙か彼方に現れる順後業というような、それを理解するべきことを最初に説いています。

その後、「修行力（坐禪）」でそれが軽減されると説き、また最後に「心本清浄」、すなわち人間の本心、大乘仏教では仏性、仏陀となる本性が備わり、お釈迦様と同様に修行次第によってではありませんが、真理、悟りの体験によつて、仏陀というレベルまで達する性質（仏性）が、誰にも具わっていると説いています。

三十祖章の鑑智大師のところに「身風恙に纏まつわるといふは癩病なり。」という問題になる文があります。ここで風恙とはなにか。風邪説もあるし、風疹説もあります。それはあまり人が好んでかかりたくない病気、すなわち「業病」となり、更には「癩病」になるという。これはもう差別語ですが、今一般に言うハンセン病ですね。現在はプロミンという特效薬を始めいろいろあつて治療できるわけですが、ほんの数十年前までそういう特效薬がなかったのです。そのため仏教では「業病」とか、「天刑病」といった差別性の強い捉え方をしています。それを瑩山禪師がどのように説いたのか。最後にまとめておきました。

「宿業」ないし「風恙」が、そのまま「癩病」に結びつくことには非常に問題があります。しかし、極端に説いていてもそれを克服することもできる、業はそのまま残るけれども、犯した罪の方は軽減される、重いのは軽く、軽いのはなくなると説かれています。つまり、業報思想の中、因と果の関係においてどうにもならないことはないというのです。矢島先生が繰り返して話されたように、仏教の基本は三業（身業・口業・意業）中の意業、つまり自由意志により善し悪しは自分で決めることができる、良いことは努力し続けることで人生を変えることができるという大事な教えが、瑩山禪師の中にも説かれているのです。

時間がないので、瑩山禪師の「人間観」「人間性」の種々相は、このあとの討論で話します。ただ、母懷観大師

が『伝光録』や『洞谷記』のなかに、いわゆる信仰の賜物というか、瑩山禅師を身ごもられるときに、観音信仰を抱いておられたこと、『洞谷記』の夢の話の中には、金環（私は太陽だと思えます）が、体内に入るのを夢で見ると孕んだというところと信仰面でつながる話です。それが、女人救済、女流濟度ということで女性を大事にする縁由となりました。

二十五歳の時、「大悲闡提之弘誓願」、すなわち自ら成仏やさとりを求めず世のため人のために粉骨碎身して尽くすという菩薩と同じ志を興したということです。